ありがたき

ありがたき（諸行無常）　1459

こんにちは、斎藤友厳と申します。
本日はありがたき、ついてお話させて頂きます。

「法句経」の一文を紹介いたします。
「法句経」とは、パーリ語で「真理のことば、法句」を意味します。
 釈尊が語った詩句を、二世紀のインドの仏教学者が選集したもので、釈尊のことばが比較的原初的な形で伝承された経典です。

一文の中に出てくる難く、というのは難しいという意味です。では読みます。

人に生まれるは難く、いま命あるは有り難く、
世にあるは難く、仏の教えを聞くは有り難し　（法句経）

人生は、なかなか私たちの思い通りにはなりません。
なにかあるたびに私たちは、憂い、悲しみ、苦しみ、悩みます。
幸せになるためにこの世に生まれたのだとしたら、いったいどうすれば良いのでしょうか？

ブッダの教えは、そんな私たちを前向きにしてくれます。

私たちは、自分の命を前に進めることしかできませんから、人生の中で避けられないことはたくさんあります。どうしても避けられないことに出会ったとき、「無常の現実」として捉えるしかありません。

「常に無い」と書いて無常ですが、無常とはなんでしょうか。

たとえば、私たちが住むこの地球は、約 46 億年まえに出来上がりました。
日本列島が今の形になったのは約 1 万年まえ、空に輝く太陽は 50 億年後の未来には燃え尽きてしまうといいます。

このように一見ゆるぎないかのように見える大地や空でさえ、生まれては形を変え、やがて消え去る運命にあります。

まして、百年生きるのが精一杯の人間の営みに、永遠に存在するもの、不変なものなどあるはずがありません。これらのことを「諸行無常」と言います。

私たちは人間に生まれたことを当たり前のことと思ったり，苦しい時や悲しい時などは，人間に生まれたことを恨んだり後悔したりしていませんか？

しかし，人間に生まれたことは，とても有り難いことなのです。

　ある時，お釈迦様が弟子の阿難（あなん）に，

「あなたは人間として生まれたことをどう思っているか」と尋ねられました。

阿難(あなん)は「大変喜んでおります」と答えると
お釈迦様が、こんなお話をされました。

「果てしなく広がる海の底に，目の見えない亀がいる。その亀が，１００年に一度，海面に顔を出すそうだ。広い海には一本の丸太棒が浮いている。丸太棒の真ん中には小さな穴がある。その丸太棒は風や海流に乗って，西へ東へ，南へ北へと漂っている。

阿難よ，１００年に一度，浮かび上がるこの亀が，浮かび上がった拍子に，丸太棒の穴にひょいと頭を入れることがあると思うか？」

聞かれた阿難は驚き，

「お釈迦様，そんなことはとても考えられません！」と答えると，

「絶対にないと言い切れるか？」お釈迦様が念を押します。

「何億年かける何億年，何兆年かける何兆年の間には，ひょっと頭を入れることがあるかもしれませんが，無いと言ってもよいくらい難しいことです」
と阿難が答えるとお釈迦様は、

「阿難よ，私たちが人間に生まれることは，この亀が，丸太棒の穴に首を入れることがあるよりも，難しい，有難いことなんだよ・・・」と話されました。

「有難い」とは「有ることが難しい」ということで，めったに無いことです。

人間に生まれることは，それほどめったにないことで，喜ばねばならない奇跡のようなことなのだと、感謝の気持ちを込めたの言葉なのです。

私たちはその人間ととして生を受け、そして生きています。

さらに、仏の教えと出会い、現実から理想の世界へ、わずらい悩みの世界から、安らぎ、悟りの彼岸の世界へと続く入口に立っています。

そのことに感謝して、日々を前向きに生きていかねばなりません。